

Collaboration Paper
for Voluntary Network in Ohmi

市民活動情報誌

vol.
122
2023
Winter

おうみネット



「特集」
食から

みえてくるもの。

インタビュー：
よびし
YOBISHIプロジェクト
琵琶湖と、タパス。 あすみ
インタビュー：川瀬明日望さん
▶ご紹介はP2

Contents

「特集」食からみえてくるもの。	P2~4
人と地域とつながる事業所さん	P5
VIVA! CHOUJU!	P5
市民活動レポート	P6~7
未来塾17期生の虫の目・鳥の目・魚の目	P7
応援インフォメーション	P8



Ohmi Network Center

淡海ネットワークセンター

公益財団法人 淡海文化振興財団

<https://ohmi-net.com/>



特集

未来に - 向かって - つなげる - つづける

食からみえてくるもの。

いま、私たちは地域差なく、同じような食生活をおくっているのではないのでしょうか。しかし、本来はその地域だからこそ食材や調理法があり、それぞれの食生活があったはずです。

様々な食材に恵まれている滋賀県。地域の伝統行事も比較的継承されていて、それに伴う伝統食も残っていると聞きます。しかし、時代の流れ、ライフスタイルの変化から引き継いでいくことが難しくなっています。地域の食とは何だろう。そこから何が見えてくるのでしょうか。

今号は「食」をキーワードに、多賀町で地域の伝統食の聞き取りを中心に活動をされている「YOBISHIプロジェクト」のみなさんと、地域おこし協力隊として沖島に赴任、「琵琶湖と、タバス。」として湖魚の新しい食べ方を提案し、活動されている川瀬明日望さんにお話を伺いました。

よびし YOBISHIプロジェクト インタビュー

イタドリ煮が物語ること

「イタドリ煮」をご存知でしょうか。ただタデ科の植物イタドリを煮たものだと思像していましたが、その工程にびっくり!

まず、イタドリをぬか漬けにして、半年後に取り出し、谷水で3日間「けだし（塩抜き・あく抜き）」をします。その「けだし」したものを今度は水道水で良く洗い、干し椎茸や山椒の実などを入れて醤油や砂糖で味付けして煮る。これでやっと「イタドリ煮」の完成です。冬の野菜がない時期の保存食として余すことなく使い切る。この「イタドリ煮」ひとつからも様々なことがみえてきませんか。

この様に昔からその地域で食べられてきた食材、調理法を聞き取りし、記録に残し未来に伝える活動をされている多賀町の「YOBISHIプロジェクト」の皆さん。今回は代表の龍見茂登子さん、小島晴香さん、石見春香さん、事務局をおく多賀町立文化財センターの音田直記さんに「YOBISHIプロジェクト」の活動から地域の「食」についてお話をお聞きました。

●「イタドリ煮」の工程にびっくりしました。

■実は、多賀町のなかでも「イタドリ煮」の調理法が様々で、そもそも「イタドリ」を食べない地域もあるんです。「ぼんがら餅」というおやつがありますが、これはサルトリイバラの葉に包まれています。その葉は、「ぼんがら」や「がらたて」、「がんたち」と町内でも呼び方が違い、素材も米粉や小麦粉、餡も小豆、そら豆と実に様々です。聞き取り調査から改めて食文化の多様性を感じますね。川の近くの集落には、その集落の暮らしが、山間部には山間部の暮らしがある。そこにある資源で工夫し、賄う暮らしですね。



4月に採取したイタドリをぬか漬け保存します。



ぼんがら(サルトリイバラ)の葉に包んで蒸した「ぼんがら餅」

「生きる力」が溢れている

●日本古来のサステナブルですね。

■その土地で伝わってきた山菜や野草、農作物を知り、調理方法を知ること、背景・文化を知ること、伝えることは、その地で「生きる力」を伝えることと思って聞き取り調査をし、残しています。そこには様々な知恵が継がれ、もし災害に見舞われたとしても極端な話、その土地で代々食べられてきた食、郷土料理は作れると思うんです。そして、本当に無駄がない。「イタドリ煮」のイタドリも余すことなく使うように、お米を採った後の稲藁も最後はお風呂の焚きもの(燃料)にし、灰になる。灰はワラビのあく抜きや、ゼンマイの乾燥保存にも使われ畑にまいてpH調整にも使われる。ゴミになるところがまったくなく見事に循環しています。

●しかし、この食文化、暮らし、知恵の継承が難しくなっていますよね。この現状をどう思いますか。

■グループ名にもなっている「YOBISHI よびし」、これは、親戚や近所の人を招き(よび)ご馳走をふるまう多賀町近隣地区の方言ですが、この「よびし(よび衆)」がなくなっています。以前なら、冠婚葬祭は各地域で行っていましたが、今は専門の業者で行なわれ、婦人会や隣組で集まり行事を担う必要性がなくなりました。また、祭りごとなど全てにおいて簡素化が進んでいます。このことが食文化の継承が難しい一因であるとも思います。

ただ、ライフスタイルを戻すことは不可能。YOBISHIが行うワークショップでは昔の暮らしを体験してもらうだけではなく、伝統食を家庭で作れる簡単なレシピと共に伝え、聞き取りだけでない活動もしています。



聞き取り調査をしつつ、レシピ作成、動画・写真撮影、記録をしています。



多賀ごぼう(桃原ごぼう)を使った料理は、ごぼう掘りイベントでふるまわれます。

●活動から多賀町の「食」を通してみえてきたものはありますか。

■いま、あるものが宝。その価値を地域で守っていきたいと思います。「食」は、人をつなぐ大きな魅力があります。聞き取り調査をもとに、様々な情報を集約し、次世代に伝えていきたいと考えています。多賀町みんなでこれから100年先も受け継がれるように継承していきたいですね。

Profile

よびし

インタビュー：YOBISHIプロジェクト

「たがのたべるをつなぐ」をコンセプトに2019年4月発足。現在40名弱のメンバーで活動。継承したい多賀町の食文化を調査・記録し、まちの魅力と合わせて発信している。冊子「多賀の食べるをつなぐ」は、あけぼのパーク多賀で販売中。

「よびしの食」が文化庁の100年フードに2022年3月認定される。

●Instagram／@yobishitaga



Instagram



note

琵琶湖と、タパス。

川瀬明日望さん インタビュー

鮎のスパイシーケチャップ和え、ホンモロコとクリームチーズのパテやエビ豆のケサディーヤ…。意外な合わせに驚きませんか。これらは「琵琶湖と、タパス。」として湖魚の新しい食べ方を提案する川瀬明日望さんのオリジナルメニュー。川瀬さんの湖魚を通しての「食」。どんなお話でしょうか。

見たことがない食材(湖魚)に出会う

川瀬さん そもそも湖魚を食べたことがなかったんです。

●と、笑う川瀬さん。琵琶湖から離れた日野町のご出身。現在50代のご両親のもと、食卓に湖魚が並ぶことがほぼなく、沖島での鮎寿司や佃煮といった食べ物、とても新鮮だったそうです。新鮮だった、沖島の郷土食、調理法を発信していこうとは思わなかったのですか？

川瀬さん 食べたことがなく、調理法を全く知らない。自分が出来るのは、経験のあるメキシコ・スペイン料理。理由はそれだけなんです。そして、郷土食は大量に仕込む料理。人が大勢集まって食べる事が前提にあると思います。しかし、今は集めることが少なく、私自身も一人暮らし。

「琵琶湖と、タパス。」では、今の状況に合わせ、経験のある調理法でアレンジし、カフェやマルシェに出店、SNSでの発信を中心に活動しました。



伝統食「鮒ずし」を作る工程のひとつ、『塩きり』をした鮒

●扱ったことがない食材・湖魚はいかがでしたか。

川瀬さん 味は良かったですね。でも骨が多い。だから、骨まで食べてしまう調理法が引き継がれているんだと改めて思いました。そして、琵琶湖の周りに住んでいても魚と言えば海の魚を想像しませんか。海外はもっと淡水魚を食べているので、海外のレシピが参考になったりするんですよ？

湖魚のハードルを高くしているのは

●「琵琶湖と、タパス。」の反応は？

川瀬さん 私自身、湖魚を「食べたことがない」ので、偏見がありませんでした。同世代の人たちも同様で、「湖魚だから」といった思いはないようです。調理法も、調味料や香辛料、スパイスを足して、足して調理するので、パツと見て何の素材が使われているのかは見えにくい。湖魚に馴染のある年代の方たちには、「魚はどこ？」なんて聞かれますね。



「琵琶湖と、タパス。」のオリジナルプレート。
湖魚はどこに？



●素材そのままの調理だけに囚われることなく、「食べたことがない」からうまれる新しい湖魚の食べ方。また、沖島漁業協同組合が行う鮒ずし講習会は盛会と聞きます。湖魚がもっと広がるのでは？

川瀬さん 「琵琶湖と、タパス。」で湖魚を知っていただいたり、鮒ずし講習会では、県外や若い人たちの参加も増え、伝

統食文化の継承に一助を担っていたら嬉しいです。ただ、ご存知のよう琵琶湖の漁獲量は減少しています。琵琶湖の魚は養殖ではありませんし、沖島の生業である漁業も衰退している現実があります。生産者（漁業者）、販売者、消費者のバランス、より良い関係性と次世代に合った物流、消費方法を今後改めて考えていく必要があると思っています。

●とは言え、「沖島の漁業を救おうとか、そんな義務感だけから琵琶湖の魚の発信をしている訳ではありません。」と、話す川瀬さん。

川瀬さん 地域を知らなければいけない仕事に就き、滋賀の魚食文化が色濃く存在する沖島という地域だったからこそ「琵琶湖と、タパス。」の活動にもつながった。何より「面白そうだったから」です。引き続き沖島に残ったのも面白そうだから。お互い様の文化も残るこの地域、私は魚を獲ることは出来ませんが、「興味湧く食材」として湖魚を、食べ方を、そして沖島を、私の出来ることでいろんな人に興味を持ってもらうきっかけをこれからも創ってきたいです。



今年の4月から漁業組合の一員として働く川瀬さん

Profile

あすみ

インタビュー：川瀬 明日望さん

滋賀県日野町出身。大学卒業後飲食店に就職、メニュー開発・デザイン業務を担う。2020年に地域おこし協力隊として沖島に赴任。任期満了後も沖島に定住。

湖魚と共に沖島の魅力も発信中。湖魚活：琵琶湖と、タパス。

●Instagram／@okishima.tex.mex

ライフスタイルの変化に伴う食文化継承の難しさ、生業としての農業、漁業の衰退。

今回お話を伺った多賀町や沖島以外の地域にも、同じような課題を抱えていることでしょう。

「美しい自然や豊かな食資源のすばらしさが、全国の人はもちろんそこに住む人にもあまり知られていない現状があります。」と、地域資源を活用し、住民主体で持続可能な地域づくりを行う方法を研究されている立命館大学食マネジメント学部教授、吉積 巳貴先生も指摘されています。

私たち自身が「滋賀の食」、「地域の食」に関心を寄せ、見直すことで何かが見えてくるかもしれません。

「食することは生きること」。そして「生きる力」に繋がる「食」。あなたの地域にはどんな「食」がありますか？

※立命館大学研究活動報RADIANT、「食」が拓く未来より一部抜粋。

吉積 巳貴（立命館大学 食マネジメント学部 教授）

研究テーマ：持続可能な食と地域づくり

専門分野：環境政策、環境教育、地域づくり



RADIANT



「株式会社 澤村 (SAWAMURA)」 まちが良くなること。その「きっかけ」を自分たちから。

今回ご紹介する(株)澤村 (SAWAMURA) は、建築会社として高島で創業し70年余り、高島を本拠地としながら滋賀・福井・京都で事業を展開されてきました。「いい会社」となることが地域への一番の貢献と考え、創業70周年を機に社としてのブランドを構築し直し、成長を続けておられます。

まずは、「こんな会社で働いてみたい。」と思う会社になること。と、今回対応くださったブランド推進室コミュニケーションディレクターの和田山翔一さん。結果は、ここ数年の新卒採用離職率、ほぼ0という数字が物語ります。最近は、「地方で自分の力を試したい」という学生も多く、新卒採用説明会の参加も年々増えているそうです。魅力ある「会社」があり、そこに人が集まることは地域活性化の原動力。だからこそ、「建設業である『自分たちができること』として、単なる箱作りではなく、働きたいと思う会社の基を提案していきたい。」と、話してくださいました。

そして、地元企業のミッションとして高島の人と地域がよりゆたかになる「きっかけ」を創ることを掲げておられ、その中で生まれたのが「SAWAMURAマルシェ」。今まで以上に時代にあった地域の人たちのかかわり、地域づくりを考えるなかで、マルシェから「地域がゆたかになる」ことを提案しようと、部署の垣根を越え実行委員会をつくり開催を始めまし

た。毎回テーマを決め、趣向を凝らしたマルシェは、地域のマルシェとして確立しつつあるようです。

また、より地域の人たちとのつながりを深めていきたいと社員が地域に飛びこみ、まちの人と共に「大溝まちづくりマルシェ」を開催。社員はあくまでサポート側にまわり、中心は地元のまちづくり協議会、そして、小中学生もボランティアで運営側に入り、皆でひとつのマルシェを創り上げたそうです。この経験は、地域の人にとっても「まち」を見直す大きなきっかけになったそうで、今年も引き続き開催が予定されています。

この様に創業から地域に根ざし、高島の魅力を高めていくことが「恩返し」と、チャレンジを続ける(株)澤村 (SAWAMURA)。会社、そして社員皆さんの熱い想いを感じる取材でした。



2018年にリニューアルした本社社屋

- 創業／1950年
- 現在地／滋賀県高島市勝野



Vol.2

スマホ首(ストレートネック)になっていませんか？

簡単にできる、ちょっとした「健康法」を日常に取り入れて心身ともに健康に！
合言葉は『VIVA! CHOUJU!』!!

人間の頭の重さは平均約4～6kg。その重みを支えているのが首です。首は本来前方に湾曲しており、その構造が頭の重さを分散させ、衝撃を和らげています。しかし現代人は長時間のデスクワークやスマホなどの見すぎで、首まわりの筋肉が硬直し、首が直線状になってしまっている人が多くなっています。

今回は、そんな通称「スマホ首」を改善していくストレッチをご紹介します。

田畑里佳 (ARICA)

インド政府公認ヨーガインストラクター。びわ湖が好きすぎて2016年、滋賀に移住。2021年にカラダが硬くても、運動が苦手な人でも楽しく運動できるフロシキを使ったYOGA【FLOWSHIKI】を考案。関西近辺でクラスを開催中。

ストレッチのやり方

- 1 頭と首の境目にふろしき(タオル)をあてます。
- 2 ふろしき(タオル)を斜め上にひっぱり頭はふろしきに委ねます。
- 3 ゆっくりと深呼吸。
- 4 頭をゆっくりと左右に揺らしてリラックス。



地域継承

ここに惹かれ、
つなぐことを。

山中町は比叡山中の、京都白川と大津市を結ぶ山中越えにある里山集落です。「風のかけたる」というグループで「聞き書きでつなぐ山中町の過去・現在・未来」という活動を行っています。2022年の夏に引っ越してきたばかりの私が、この集落の聞き書きを始めたのは、山中町が魅力に溢れた土地であったことが大きな理由です。

引っ越す前から、今まで住んでいたところでは考えられないくらい、近所の方からいろいろなお世話をいただきました。近所づきあいが苦手だった私は面食らいましたが、しばらくすると、そのお世話が、山中町に住む上ではたいへんありがたいことであるのがわかってきました。初めての夏に集落を縦断する川があふれ、冬には水道が凍り道路が凍結しました。夜には鹿の鳴き声が響き、時には猿の群れが来襲し威嚇されます。何か困ったことがあっても、今までのようにネットで検索したら解決ということはありません。助け合いが必須の土地だからか、皆さん近所付き合いが上手です。近づくところと、ずっと引くところが絶妙で、自然とその所作を真似していました。山中町の自然は、厳しいだけではありません。視界を四季の山の色が覆い、鳥の声、川の音の心休まる響きが常にあります。山中町の自然と、人との交わりの割合が私の生活の多くを占め、それはこちよい変化でした。これが地に足がつくということでしょうか？ そうなってくると、町の方々が皆学すべき先輩に思え、その範囲がさらに広がって、この環境で生きてきた昔の人々までも敬うべき先人、同じものを喰らった仲間のように思われてきました。その気持ちが高まった末の聞き書き活動、今は老若男女の3組目までお尋ねしています。この間は、話に出てきた地蔵盆の数珠回しにも参加できました！（上記写真）来年の3月には、冊子にまとめ、皆さんにこの山中町のダイナミズムをお伝えできればと思っています。

【寄稿】藤井愛子さん

2023年度湖国文学活動応援むらさき基金採択団体

風のかけたる

●代表／藤井愛子 ●設立／2022年10月

学生×地域支援

ぶっ飛び、乗っかりOK！
そして全部ジブンゴト。

立命館大びわこ・くさつキャンパスで昨年より定期的に開催されている「地域課題を全力支援! まちのジブンゴト“feel→do!”（フィールド）」。

あまり告知がされていないにもかかわらず、毎回定員超え、そして、リピーター率の高さも誇る“feel→do!”。どこにその秘密があるのでしょうか。立命館大学BKCリサーチオフィス職員の則武麻里さんにお話を伺いました。

神奈川県鎌倉市で開催されている、肩書きや立場を超え、まちの活性化にチャレンジするプロジェクトに対し、プレスト（ブレーンストーミング）という手法でアイデアを次々に出し、応援する地域活動「カマコン」。自分たちでもやりたい! と、則武さんが大学の部課を超えて地域連携課や学生オフィスの職員と共に動き出すと、地域の人たちは大学生とつながりを持ちたい思いがあり、学生たちも実は、地域に興味があることがわかったそうです。しかし、その接点や機会が少ないことから、お互いのプラットホームとして、またコロナ禍で課外活動はもちろん、人と接する機会さえ失ってしまった学生たちのチャレンジの場を提供したいと考え、各方面に協力を求めたところ、大学や地域の人たちから大きなサポートを得て運営チームを結成、一気に実現化したそうです。

そして昨年10月から、地域課題に触れて（feel）あなたなりに（→）実行する（do）! という意味と、「草の根活動」が根付く「野原」、エネルギーが集まる「磁場」のような場所にしたいという思いを込め「“feel→do!”（フィールド）」と名付けスタート。始まるや否や大きな反響を呼んでいます。「大人も学生も、立場を超えてフラットな関係性でかかわれる場が求められているのかもしれない」と、則武さん。そして、つい「ちゃんと」や「ねばならない」に縛られていませんか。その思考の枠が外れ、地域の課題を「楽しみながら」自分事になっていく体験は「説明しても伝わらないんですよ」と、いう事で皆さんも是非、体験してみてください!

まちのジブンゴト“feel→do!”（フィールド）

●運営／立命館大学“feel→do!”運営チーム
●設立／2022年10月 ●Instagram／@feel_do_r

コミュニティづくり

世代を超えたみんなの居場所 ～であい・くつろぎ・あそび～



大津市にある、元、三井寺南別所「両願寺」を改装された緑いっぱいのカフェ「manma（マンマ）」。

木の温もり溢れる店内は、貸スペースとしても提供され、ベビーマッサージや健康体操、朗読の会や小さな個展、少し学校に行きづらい子どもやお母さんの集いなど、様々な活動が行われています。たくさんの方から慕われている店主、西田久美子さんにお話を伺いました。

長年保育士としてご活躍、大津市の「子育て総合支援センター ゆめっこ」の立ち上げにも携わってこられた西田さん。「地域の誰もが」、「気兼ねなく」、「自然豊かな場所で」集い、くつろげる小さな居場所、そんな場所を作りたい！という西田さんの想いと、両願寺を「地域貢献に使いたい」という三井寺さんの想いがつながり、健康と活動力の源である「食」も大切にされていることから、カフェという形で実現しました。

赤ちゃんから年配の方まで多くの人が集うここは、赤ちゃんが泣いても子どもが走っても大丈夫！何より「誰かの“やってみたいこと”を、必ず実現できるように全力で応援し、ともに楽しみたいんです。そして、参加した人が何だか幸せな気持ちになれば嬉しいですね。」と、企画側ではなく、あくまで側面から応援することに専念。それでもさらに、自然や木に触れて遊べる広場を作りたい！と、新たな夢の実現に向けて走りだされています。

「ただいま！」と、お店に来てくれる顔なじみの子ども、来られる度に明るい表情になっていくお母さん…。お話の中に何度も繰り返された「誰もが・気兼ねなく」の言葉通り、manmaではみなさん心地よくくつろいでおられ、そんな光景を見るのが幸せと話す西田さん。これからもみんなの居場所として、また、小さなチャレンジの場として優しく寄り添うmanma。あなたも訪れてみてはいかがでしょうか。何かハッピーなことにつながるかも…。

manma

●代表／西田久美子 ●設立／2020年2月
●Instagram／@manma_kumiko

Challenger



未来塾17期生の

虫の目・鳥の目・魚の目

「おうみ未来塾」の17期生26名の入塾式も9月に終わり、本講座も3回を迎えています。塾生の中に様々な想いが芽生えていることでしょう。今回は塾生の先輩でもあり、17期を牽引くださる運営委員4名の皆さんからのメッセージをお届けします。

運営委員からのメッセージ

■根木山恒平

私たちが暮らす滋賀県は、琵琶湖の集水域におよそ重なる県境を持ち、まさに琵琶湖流域の自然とともに、地域の暮らしがあります。自然との共生のあり方を小さな地域の中でリアルに実践し、人びとの心温まる物語を共に紡いでいきましょう。

■大河原佳子

忘れもしない「権座」の夜明けの風景。7期生の「ひょうたんからKOMI」の活動をきっかけに、今は地域の人たちの手によって、課題だった飛び地の田んぼがブランドになりました。多様な立場、考えの人たちが集るからこそ、まさに「瓢箪から駒」が出ることも。これが未来塾の醍醐味です。未来塾を通じた出会いと経験は人生の財^{たから}となりました。17期生のみなさん、一緒に取り組みましょう！

■木田桃子

従来の体制が変わり、今年から運営委員と卒塾生のネットワークを駆使して未来塾を開催しています。活躍する先輩との出会いをきっかけに、「住民」「キーマン」「関係人口」とより多様な立場の人が関わる地域をプロデュースする仲間が誕生することを楽しみにしています！

■山本泰裕

今回、運営委員にご指名いただきましたが、私自身もまだまだ発展途上の地域プロデューサーのヒヨコです。塾生の皆さんと一緒に学び、素敵な地域プロデューサーになりましょう！卒塾生の皆さんも積極的に関わっていただいて、一緒に未来塾を創っていきましょう！

おうみ未来塾 運営委員

【メンバー】
根木山恒平
大河原佳子
木田桃子
山本泰裕
藤田知文（運営委員長）



募集 2024年度 未来ファンドおうみ助成事業の募集

未来ファンドおうみ助成事業の募集が始まります。募集にかかる説明会を開催いたします。多くの方のご参加・ご応募をお待ちしています。

【助成事業】

- ①びわこ市民活動応援基金助成
- ②びわ湖の日基金助成
- ③積水化成品基金助成
- ④笑顔あふれるコープしが基金助成
- ⑤ナカザワNEOフレンドシップ基金助成
- ⑥げんさん食育NPO基金助成
- ⑦湖国文学活動応援むらさき基金助成
- ⑧びわ湖源流の木遣い応援もえぎ基金助成

【応募受付期間】

2023年11月10日(金)～2024年1月12日(金)17時必着

【募集説明会&申請書の書き方講座】※申込要

- 米原 11月21日(火) 10:15～11:45 米原公民館3B研修室
- 大津 11月22日(水) 13:30～15:00 淡海ネットワークセンター
- 大津 11月26日(日) 10:00～11:30 淡海ネットワークセンター
- 水口 11月28日(火) 10:15～11:45 水口中央公民館 2F研修室

※募集案内・申請書のダウンロード、説明会の申込みは

下記URL(またはQR)をご覧ください。

<https://ohmi-net.com/jyousei/bosyu/>

申込QR→

【申込み・問合せ】淡海ネットワークセンター(佐藤)TEL.077-524-8440

セミナー 社会的インパクトセミナー 2023 「社会的インパクト評価ってどう使う? ～休眠預金活用等の実践事例から～」

【日時】2023年11月16日(木) 14:00～16:30(予定)

【会場】滋賀県立県民交流センター(ピアザ淡海) 206会議室

【講師】山口美知子さん(公益財団法人東近江三方よし基金 プログラムオフィサー)

【事例発表団体】一般社団法人Team Norishiro、NPO法人愛のまちエコ倶楽部

【申込方法】右のQRコード、お電話またはE-mail(講座名、お名前、所属、電話番号を明記)にてお申込みください。

※参加費無料

TEL:077-524-8440 E-mail:office@ohmi-net.com

申込QR→

お知らせ 市民活動フォーラム2023 「続く活動と組織の秘訣 ～想いを受け入れ、組織を育む～」

【日時】2023年12月2日(土) 13:00～16:00

【場所】まちづくりスポット大津(ランチ大津京内)

【共催】淡海ネットワークセンター(公益財団法人 淡海文化振興財団)

特例認定NPO法人まちづくりスポット大津

【問合先】大津市におの浜1-1-20(ピアザ淡海2F)077-524-8440

E-mail:office@ohmi-net.com 淡海ネットワークセンター 担当:北川

■コーディネーター

深川 光耀さん(花園大学社会福祉学部 准教授)

■事例発表

- ・認定NPO法人くさつ未来プロジェクト 代表理事 堀江尚子さん
- ・公益財団法人 江北図書館 館長 久保寺容子さん
- ・NPO法人京都こどもセンター 青年部KAMONASU代表 細見侑亮さん

決算講座 会計・税務相談会

NPO・市民団体の会計・税務についての専門家相談会を開催します。

【日時】2023年12月13日(水) 13:30～15:30

【相談時間】1団体あたり30分(相談団体数は、4団体を上限とします)

【場所】滋賀県立県民交流センター 201会議室

【参加費】1,000円/1団体

【相談対応】税理士法人横井会計 横井昭次氏

お礼 未来ファンドおうみへ ご寄付ありがとうございます。

貴重なご寄付を賜りました皆様方に心より感謝申し上げます。この支援金は、滋賀の市民社会を良くしようとがんばっておられる市民活動団体へ助成し、皆様のお気持ちを伝えながら、おたがいさまがつながり、活きる地域を創るために活用させていただきます。

- 一般社団法人 比良里山クラブ様 「びわ湖の日基金」
- 近江通商株式会社様 「びわ湖の日基金」
- 株式会社JINEN様 「びわ湖の日基金」
- 株式会社アサヒテックコーポレーション様 「びわ湖の日基金」
- 株式会社材光工務店様 「びわこ市民活動応援基金」
- 株式会社鮮魚たかぎ様 「びわ湖の日基金」
- 株式会社タナカヤ様 「びわ湖の日基金」
- 株式会社たまゆら様 「びわこ市民活動応援基金」
- 株式会社ナカザワ様 「ナカザワNEOフレンドシップ基金」
- 株式会社中谷組様 「びわ湖の日基金」
- 株式会社日吉様 「びわ湖の日基金」
- 株式会社ロハス長浜様 「びわ湖の日基金」
- 元三フード株式会社様 「げんさん食育NPO基金」
- 甲西陸運株式会社様 「びわ湖の日基金」
- 合同会社バンクツ様 「びわ湖の日基金」
- 生活協同組合コープしが様 「笑顔あふれるコープしが基金」
- 積水化成品工業株式会社様 「積水化成品基金」
- びわこ総合サービス株式会社様 「びわこ市民活動応援基金」
- びわ湖チャリティ100km歩行大会実行委員会様 「びわ湖の日基金」
- 有限会社ノリアキ工房様 「びわ湖の日基金」
- 荒堀 順子様 「淡海ネットワークセンター運営基金」
- 鳥居 静夫様 「びわ湖の日基金」
- 匿名 「湖国文学活動応援むらさき基金」
- 匿名 「びわ湖源流の木遣い応援もえぎ基金」

2023年10月10日現在
(50音順)

下記の皆様から賛助会費をご入金いただきました。厚く御礼申し上げます。

【法人・団体会員】

特定非営利活動法人あめんど、株式会社近畿理研、甲賀高分子株式会社、生活協同組合コープしが、公益財団法人滋賀県産業支援プラザ、滋賀県ダイハツ販売株式会社、ハマミ工業株式会社、琵琶湖汽船株式会社、株式会社メリーデイズ、株式会社幸兵衛造船所、株式会社山正、税理士法人横井会計

【個人会員】

板倉 成子、宇那木 潤、遠藤 恵子、大岡 紳浩、岡部 健治、勝身真理子、金子 瑞穂、川辺 恵子、菅 哲哉、木田 桃子、北村 裕明、木村 健治、櫻田 満、里西 薫、澤 孝彦、清水 一記、城田 義隆、曾江 克弘、洲崎トモ子、大道 隆和、高山 朋子、瀧澤 正孝、辻 博子、長澤 嘉徳、中野 雅之、中村 淳子、橋田 卓也、原田 久明、廣部千英子、福永 忠克、藤井 絢子、伯耆 雅美、堀 茂樹、前川 誠、村岡 孝浩、村西 耕爾、目片 佳子、森 由利子、森口 行雄、米倉 崇、匿名59名

2023年10月10日現在(敬称略、50音順)

日本政策金融公庫国民生活事業は みなさまの身近な政策金融機関です。

- ・NPO法人のみなさまもご利用いただけます。
- ・新たに事業を始める方にもご利用いただけます。
- ・経営に役立つ情報をご用意しています。

新たに事業を始められる方へ

新規開業ローン

中小企業・小規模事業者のみなさまへ

国の事業ローン

お子さまの教育資金を必要とされる方へ

国の教育ローン

お問い合わせは



日本政策金融公庫
国民生活事業

大津支店 国民生活事業 TEL077-524-1656
彦根支店 国民生活事業 TEL0749-24-0201

お気軽にご相談ください。

日本公庫

検索

淡海ネットワークセンターは、県内の市民活動、NPOをサポート・ネットワークしています。

発行日/2023年11月1日 発行所/公益財団法人 淡海文化振興財団

〒520-0801 大津市におの浜1-1-20 ピアザ淡海2階

TEL:077-524-8440 FAX:077-524-8442

<https://www.ohmi-net.com> E-mail:office@ohmi-net.com

開館日:市民活動ふらっとルーム/火～土曜日(火～金曜日の祝日は休館)

事務所/火～日曜日



この印刷物は大豆油インキを含まない植物油インキを使用しています。